

対馬の闇

巧妙な手口

春日信彦

キリシタン

11月3日（土）文化の日、沢富とひろ子は、母親との話し合いの結果を伊達夫妻に報告していた。いつものキッチンテーブルの席に腰掛けた沢富は、不安げな表情をしていた。母親は結婚を承諾してくれたような表情だったが、父親の承諾を得るまでは不安だった。なんとなく母親は承諾してくれた様子だったが、沢富は正式な承諾は後日になることを伊達夫妻に告げた。伊達夫妻も沢富家の意向を確認するまでは、気が気ではなかった。沢富とひろ子は、何となく元気がなかった。ナオ子は励ますようにひろ子に声をかけた。「そう、まだはつきりしないの。でも、お母さまは、承諾して下さったみたいだから、希望はあるわね。ひろ子さん、そう、落ち込まなくて、いいわよ」ナオ子は、きっと、承諾してくれると信じたが、やはり、不安はぬぐい切れなかった。

ひろ子を元気づけようとナオ子は、前祝をすることにした。「きっと、うまくいくわよ。今日は、仲人からの前祝。タイの造りよ。パ〜〜といきましょう。そう、ところで、お母さま、私たちのことについて、何か、言ってらっしゃったかしら」沢富は、一瞬身を引いた。気まずそうに頭を掻きながら返事した。「いや、仲人のことまで話ができなくて、すみません」ナオ子は、顔を引きつらせた。仲人の話がなされてなければ、結婚が承諾されても、仲人ができるとは限らないと思った。「え、仲人のこと、話していないの。二人の結婚をここまで運んできたのは、私たちよ。まさか、裏切るってことはないでしょうね。サワちゃん」ナオ子は、沢富をじろっとにらみつけた。

即座に、沢富は大きく目を見開いて怒鳴るような声で返事した。「とんでもない。裏切るなんて。仲人の件は、必ず守ります。信じてください」少しホッとしたナオ子は、やさしい口調で返事した。「それだったらいいんだけど。たとえば、お父様が私たち以外の仲人を指示されても、断固、断ってよ。いいわね、サワちゃん」大きくうなずいた沢富は、大きな声で返事した。「はい、神に誓って、お約束いたします」ナオ子は、結婚式場で仲人をしているドヤ顔の自分の姿を思い浮かべ、ニコツとした。「サワちゃんを信じるわ。うまく事が運んだとして、結婚式は、東京ってことかしら」沢富は、小さくうなずき返事した。「おそらく、東京だと思います。親戚は、ほとんど東京ですから」

ひろ子は、うつむいたまま元気がなかった。思い悩んでいるようなひろ子にナオ子は声をかけた。「ひろ子さん、何か、困ったことでもあるの？言いたいことがあれば、言っていいのよ。あ、そうよね、ひろ子さんの親戚は、対馬か。東京が式場となれば、対馬から行くの、大変ね」ひろ子は、黙ってうつむいていた。だが、勇気を振り絞って告白することにした。「まだ、サワちゃんに言っていないことがあるんです。ごめんなさい」身を乗り出した沢富と伊達夫妻の視線は、ひろ子に向かった。ナオ子が、小さな声で話を促した。「ひろ子さん、いったいどんなこと。思い切って、話して。隠し子がいるってこと以外、決して、驚かないから」沢富も伊達も小さくうなずいた。

ひろ子は、顔を引き締めると小さな声で話し始めた。「口森家は、キリシタンなんです」ひろ子は、ガクンと首を垂れた。ナオ子が、同じ言葉を声に出した。「キリシタン」同じように、伊達も沢富も口をそろえて声にした。「キリシタン」ナオ子は、キリシタンにどういう意味があるのかよくわからなかった。「ねえ、キリシタンって、結婚とどう関係があるの？結婚に、宗教は関係ないでしょ。サワちゃん、キリシタンがいやってことはないよね」沢富は、無言でうなずき、返事した。「ひろ子さんが、キリスト教でも、僕は構わない。沢富家は、臨済宗だけど、別に構わないと思うんだが」沢富は、ひろ子の表情を覗き見た。

頭を持ち上げたひろ子は、ほっとした表情で話し始めた。「そう言っていただくと、気が楽になります。でも、ちょっと困ったことが・・・」ナオ子は、身を乗り出して質問した。「ちょっと困ったことって？」気まずそうな表情のひろ子は、話を続けた。「キリシタンが、明治初期、政府に弾圧されたことは、ご存知だと思うんですが、今でも、父は残虐な拷問をした警察を憎んでいるんです。昔のことだから、忘れてしまえばいいと思うんですが、父は、そうもいかないのか、警察官とは結婚するなって、わけのわからないことを言っていたんです。困ったものです。サワちゃんとの結婚、許してもらえるか不安なんです」

ナオ子は、沢富家さえ承諾すれば、万事ことが進むと思っていたが、口森家の意外な問題に面食らってしまった。宗教に関しては、どう対処していいものか頭を抱えてしまった。「それは、困ったわ。下手に口出しすれば、お父様を怒らせることになるような。どうしよう、あなた」伊達も宗教のことは、全くお手上げだった。「俺に聞かれてもな～～。キリシタンの弾圧は、極悪非道だったと聞いている。俺だって、同じ目にあったら、死ぬまで憎むだろうな。でもな～～、それは、昔の話だ。今は、平成だし。結婚とは、別だと思うんだが。困ったな～～」伊達も肩を落として、ガクンと首を垂れた。全員首を垂れて、お通夜のような雰囲気になってしまった。

沢富は、ヒョイと頭を持ち上げると元気よく話し始めた。「大丈夫ですよ。二人の気持ちをぶつければ、きっとわかってくれますよ。確かに、キリシタンの弾圧は、あつてはならないことだと思います。お父様は、憎しみを引きずっておられるのですが、憎しみからは、幸せは生まれません。憎しみを断ち切るこそ、幸せの第一歩だと思います。僕に任せてください。僕が警察を代表して、頭を下げてきます」ひろ子の顔にほんの少し笑みが浮かんだが、すぐに消え去った。「サワちゃん、ごめんね。うまくいくといいんだけど。ア～～～」ひろ子は、またもや首を垂れた。

宗教音痴で手も足も出ないナオ子は、ひろ子の父親のことは沢富に任せることにした。「ひろ子さんのお父様を説得できるのは、サワちゃんしかいないわね。頼むわね。二人の気持ちを全力でぶつけていらっしやい。娘の幸せをぶち壊す父親なんていないわよ。サワちゃん、ガンバ」ひろ子もそう願ってはいたが、父親の頑固さを考えると気持ちが萎（な）えてしまった。伊達も自分ではどうすることもできないと思い、沢富を励ました。「俺たちには、荷が重すぎる。父親の心を動かせるのは、ひろ子さんへの気持ちじゃないか。男の心意気を見せてやれ。もし、頭を下げて、ウンと言わなければ、警察をやめるといえばいい。なあ、サワ」

沢富は、警察をやめれば、と聞いて一瞬ぐらついた。警察をやめれば、結婚できるのならば、警察をやめていいと思ったが、今度は両親が反対するのではないかという不安が起きた。「そうですね。いざとなれば、警察をやめます。僕も男です。万が一、警察をやめて結婚することに両親が反対すれば、駆け落ちします」ひろ子は、大変のことになってしまったと顔を引きつらせて話し始めた。「サワちゃん、そう悲観的にならなくていいんじゃない。とにかく、二人で説得しましょう。警察という職業に恨みを持つほうがおかしいのよ。間違っているのは、父なのよ。サワちゃん、とにかく、対馬に一緒に行って」巖流島の宮本武蔵を思い浮かべた沢富は、胸を張って大きくうなずいた。

伊達は、大きな声で檄を飛ばした。「とにかく、二人でお父さんを説得することだ。な、ナオ子」ナオ子も沢富の熱意にかかっていると思えた。「男なら、当たって砕けろよ。いざとなれば、仲人の私たちも土下座してお願いしてあげるから。勇気を出して、突撃しなさい。飛行機で行けば、福岡空港から対馬空港まで1時間もかからないんじゃない。ね、ひろ子さん」ひろ子は、不安げな顔でうなずいた。「まあ、対馬空港でレンタカーを借りて走れば、空港から1時間ぐらいで着きます」ナオ子に笑顔が浮かんだ。「すぐそこじゃない。早速行ってらっしゃい。善は急げ、って言うじゃない」伊達もポンと手を鳴らし沢富に声をかけた。「手土産は、ちょっと気張ったほうがいいな」

対馬の実家

早速、ひろ子は、父親に彼氏を紹介したいと連絡をとった。最近、体調がよくなってきた父親は、快く承諾した。また、姉の陽子は漁協で働いていたが、有休をとって空港まで迎えに来てくれることになった。10日（土）二人は福岡空港午前10時15分発の便に乗り、10時55分に対馬やまねこ空港に到着した。待ち合わせ場所にしてきた空港前の駐車場には白いアルファードが待機していた。ひろ子を素早く確認した姉の陽子は、車から飛び降り植木の隙間から大きく手を振って合図を送った。合図に気づいた二人も両手を振って笑顔を返した。姉に駆け寄ったひろ子は沢富を紹介した。「おねえちゃん、ありがとう。こちら、沢富さん」女優のような美人の姉に面食らった沢富は、顔をこわばらせて挨拶した。「沢富と申します。よろしくお願いします」二人が乗り込むと陽子はアクセルを踏み込んだ。

二人を乗せた白のアルファードは国道382号線を北上した。陽子は大きな声で後部座席の二人に声をかけた。「まずは、そば道場、で食事ね。沢富さん、こんなド田舎、初めてでしょ。何にもないところだけど、景色と空気はいいから。ひろ子は、田舎者で不作法だけど、よろしくお願いします」流れる山並みの景色をぼんやり眺めていた沢富は、小さな声で返事した。「いや、ひろ子さんには、いろいろと助けてもらっているんです。あ、言い遅れましたが、僕は、警察官なんです。でも、普通の男です。お聞きにならねたいことがあれば、ざっくばらんに、何でも質問してください」ひろ子は顔を引きつらして弁解する沢富を覗き見て、笑いが込み上げてきた。

ひろ子は、沢富の緊張をほぐそうと声をかけた。「サワちゃん、心配しないで。家族には、刑事だということは、伝えているから。ね、おねえちゃん」陽子は、明るい声で返事した。「沢富さん、心配しないでください。家族全員、カトリックなんですが、父だけが、意固地で、昔を引きずっているんです。でも、根は、やさしんです。気を悪くなさらないでください。沢富さんは、とてもやさしい方だと伺っています。母も私も、結婚には大賛成です。父もきつと賛成すると思います」沢富は、すでに自分の素性が知られていることに少し安心した。「ご家族は、カトリックでいらっしゃるんですね。でも、政府のやったキリシタンへの弾圧は、許されるものではありません。お父様の気持ちは、ごもつともだと思います。すみませんでした」沢富は、後部座席から頭を下げた。

それをルームミラーで覗き見た陽子は、甲高い声で話し始めた。「沢富さんが謝ることはありません。沢富さんが悪いんじゃないから。悪いのは、政府です。とにかく、昔のことは、忘れましょう。憎しみからは、幸せは生まれませんから。愛すること。許すこと。感謝すること。神のお言葉です」沢富は、大きくなずいた。「その通りです。憎しみからは、幸せは生まれませんね。刑事をやっていると、ついつい、憎しみばかりになってしまいます。よくないことです。反省しています。ところで、お姉さんも、歌がお上手なんでしょうね」ひろ子は、話を変えるグッドタイミングと即座に返事した。「姉も上手よ。二人とも、カラオケハウスで子供のころから歌ってたの」

大きくなずいた沢富は、国道沿いに流れる民家を眺めては、いつまでも続く山並みを見つめた。「やはり、おじょうずですか。ところで、山林の中に国道があるって感じですね。島の約9割は山林と聞いてますが、やはり、農業よりも漁業をされてある方が多いんでしょうか？」ひろ子が返事した。「この島は、何にもないところなのよ。漁業と林業って感じ。全くパ〜〜としない、とっても静かな町。おねえちゃん、会社はどう？うまくいってる？」姉は、明るい声で答えた。「大丈夫よ。危機は乗り越えたみたい。まあ、イカで持ってるってとこね。ここで生まれて、ここで育ったんだもの、くよくよしてもしょうがないじゃない。今年、新しい船を買ったみたいよ」ひろ子は、少し安心した。父親の機嫌がいいように思えたからだ。

沢富は何を話していいかわからず、ただただ、代わり映えのしない山並みをぼんやり眺めていた。ひろ子に質問した。「人口は何人ぐらいですか？」ひろ子は、はっきりとは知らなかったが、思い出しながら答えた。「おそらく、3万人ぐらいじゃなかったかな〜」うなずいた沢富は、糸島市と比較した。「へ〜、約3万人ですか。糸島市の3分の1ってとこか。そうだ、対馬といえば、ツシマヤマネコですよ。是非、見て帰りたいな〜」即座に、ひろ子が返事した。「ヤマネコセンターに行けば見れるわよ。食事の後に行ってみよう。ねえ、いい、おねえちゃん」陽子は、ルームミラーを覗きながら返事した。「いいわよ。沢富さん、行ってみたいところがあったら、遠慮なく言ってください。小さな島だから、すぐに行けますよ」

空港を出発して40分は過ぎていたが、依然として山林の中を走っていた。「かなり遠いんですね。ご自宅まで」ひろ子は、気まずそうに弁解した。「サワちゃん、ごめんね、あの時は、1時間ぐらいって言ったけど、1時間半ぐらいかかるの。この道って、曲がりくねってるし、細いし、飛ばせないのよ」沢富は、のんびりと道中を楽しむことにした。猫が好きな沢富は、ツシマヤマネコについて考えていた。約10万年前に、当時陸続きだった大陸からわたってきたらしい。おそらく、朝鮮半島をてくてくと歩いてきたのだろう。一時期は、数百頭はいたんだろうが、今では100頭もいないらしい。家猫はどんどん繁殖するのに、ツシマヤマネコは一向に繁殖しない。どうしてだろう。人間とは相性が良くないのだろうか？何度か、ツシマヤマネコの写真を見たことがあったが、なんとなく、悲しそうな顔をしていた。

陽子は、ルームミラーを覗き込みながら二人に声をかけた。「思ったより、早く着くわよ。あと15分もすれば、対州（たいしゅう）そばが、食べられるわよ。沢富さん、対州そばは、初めてでしょ」対州そばという言葉は初めて聞いた沢富は、質問した。「対州そば、って初めて聞きました。普通のそばと違うんですか？」ひろ子が、即座に返事した。「そうね～～、味というより、香りかな。いい香りがするのよ。きっと、気に入るから。対州そばは、対馬でしか食べられないはず。きっと自慢できる体験になるから。あ～～、おなかすいちゃった～～。早くえび天そば、食べたいよ～～」朝抜きの沢富もお腹がグ～～となり始めた。「対馬といえばツシマヤマネコぐらいしか知らなかったけど、そのほかにも珍しいものがあるんですね」

ひろ子が、ちょっとしかめっ面で話し始めた。「まあ、珍しいものはあるけど、つまらないとこよ。まったく変わり映えしないし、世間知らずの田舎者の集まりって感じ。観光客といえば、下品な韓国人ばかり。私は、こんなとこ、好きじゃない。福岡に出て、せいせいした。おねえちゃんは、ド田舎が好きみたいだけど」陽子が即座に返事した。「もちろん大好きよ。いいじゃない。田舎者で。きれいな海に囲まれて、澄んだ空気を思いっきり吸って、毎日、元気に暮らせれば、それで十分じゃない。最高の贅沢だと思うけどね」姉妹の会話を聞いていると、二人とも美人だが、性格は違うように思えた。東京育ちの沢富は、福岡の田舎にびっくりしたが、対馬は田舎というよりジャングルにしか思えなかった。

左手の佐須奈湾（さすなわん）を覗き見たひろ子は沢富の右肩をポンとたたいた。「サワちゃん、ほら、見て、漁船が並んでるでしょ。もう、ここからはすぐだから」漁船と聞いて今問題になっている対馬放火殺人事件を思い出した。長崎地裁は無期懲役の判決を下したが、地検は死刑を主張し、福岡高裁に控訴した。依然として、被告側は無罪を主張している。こんなド田舎でも殺人事件があることを考えると、都会も田舎も人の気持ちは同じように思えた。ひろ子がまた沢富の右肩をポンとたたいた。「ほら、あそこ。後、200メートルぐらい」右手に北警察署が見える交差点を徐行すると陽子がハンドルを左に切って小さなスロープを登った。20台ほど駐車できる駐車場の店入り口近くに駐車すると、ルームミラーを覗き込み後部座席の二人に到着を知らせた。「到着。沢富さん、退屈だったでしょう。ちょうどいい時間についたわ。さあ、降りて」

三人は、テーブルに着くとえび天そばを注文した。沢富は、姉を味方につけるために根回しをすることにした。「お姉さんは、僕たちの結婚に賛成なんですね。ひろ子さんから、お父様は、警察が嫌いだとお聞きしたんですが、どの程度お嫌いなんでしょうかね〜」陽子は、ちょっとマジな顔つきで返事した。「そうね〜。できれば、八つ裂きにしたいって言ってます。根に持っているんですよ。おそらく、父の政府に対する憎しみは死ぬまで消えることはないと思います。明治政府は、全く残虐よね。実は、私も、はらわたが煮えくりがえるくらい、警察を憎んでいます。でも、忘れることにしています。当時の警察官は、政府の命令で極悪非道な弾圧をしたのでしょ。でも、沢富さんとは何の関係もありません。堂々と胸を張って、父を説得してください」

沢富は、姉の言葉で少し気が楽になったが、父親がいまだ恐ろしかった。「そうやっていただけると、気持ちが楽になります。いつの時代も、国家権力というものは恐ろしいものです。何の罪もない人たちを拷問にかけたり、殺戮したり、全く許せません。お父様が、政府や警察を憎まれるのは、本当に、もっともなことです。でも、二人の結婚だけは、許してほしいと願います。お姉さん、僕たち二人を助けてください。お願いします」陽子は、笑顔で大きくなずいた。「当然です。こちらこそ、よろしく願います。ひろ子の結婚を一番喜んでいるのは、母なんです。わがままな妹ですが、末永く願います。カトリックでは、離婚はできません。沢富さんは、誠実そうで安心しました。よかったわね、ひろ子」

沢富は、離婚することはないと思ったが、念のために質問した。「離婚できないくらいだから、浮気なんかしたら、大変なことになるでしょうね」陽子は、目を丸くして返事した。「そうですとも。浮気したら、死刑です。カトリックの戒律は厳しいんです」死刑と聞いて沢富の顔が引きつった。ひろ子が、笑顔で口をはさんだ。「ちょっと～、おねえちゃんたら～。サワちゃん、青くなってるじゃない。サワちゃん、浮気、しないわよね」背筋を伸ばした沢富は大きくうなずいた。カトリックは、戒律が厳しいとは聞いていた。今後、カトリックの人たちと付き合っていくと思うと、気が重くなってきた。「お姉さん、カトリックの戒律については全くわからないので、お手柔らかに教えてください」ひろ子は、陽子の脅しにビビっている沢富を横目に見てクスクス笑い出した。

食事を終えた三人は、ツシマヤマネコを見に行くことにした。陽子は、沢富に日本海の絶景を見せようと、来た道に戻るように国道382号線を南下し、わき道へ右折して海岸沿いの道を走ることにした。海岸沿いの井口浜キャンプ場を通過すると異国の見える丘展望台で少し休憩し、アジサイ・ロードを通過し対馬野生生物保護センターに向かった。ヤマネコセンター見学後、棹崎公園（さおざきこうえん）の近くの日本最北西端の碑で記念撮影をして帰路についた。田舎道は飛ばすことができず、予想していた以上に時間がかかり、佐須奈漁協近くのひろ子の実家についてのは5時を少し過ぎていた。実家は瓦葺の古びた家だと思っていたが、3年前に新築された中庭のあるモダンな和風建築の家だった。沢富は、リビングに通され、父親がやってくるまで待たされた。中庭をぼんやり眺めていると背が高く顎ひげを生やしたイケメンの父親が夫人に支えられゆっくりと歩きながら現れた。

即座に立ち上がった沢富は、挨拶した。「初めまして、沢富と申します」父親は、小さな声で挨拶した。「ようこそ、いらっしやいました」父親は、2年前に脳梗塞で倒れ、3か月近く入院していた。右半身が少し不自由になったが幸運にも言語障害にならなかった。右足の動きがぎこちなくなっただけ、若干バランス感覚が悪くなり俊敏な動きができなくなっていた。静かに腰掛けた父親は、笑顔を作り、ひろ子に声をかけた。「ひろ子も座りなさい」ひろ子は、沢富の右横に腰掛けた。沢富は、初対面から単刀直入に結婚のことを切り出すのは不作法に思え、父親を気遣うことにした。「ひろ子さんから、体調が思わしくないとお聞きしてましたが、お体は大丈夫ですか？」

父親は、働くことはできなくなったが、生活する上では不自由はなかった。「右がやられました。無様な姿をお見せして。仕事ができんということは、情けないですな～～」父親は、全く元気がなかった。ひろ子が声をかけた。「でも、会社は順調らしいじゃない。お父さんは、のんびりと趣味でもやればいいのよ」陽子が、お茶を運んできた。沢富は、差し出されたお茶を一口すすった。沢富が警察官であることを陽子からすでに知らされていた父親は、苦虫を噛み潰したような表情でしばらく口を開かなかった。ひろ子の右横に腰掛けた陽子は、沢富を気遣い父親に話しかけた。「沢富さんは、お父さんと同じ、猫好きなんだって。早速、ヤマネコセンターに行ってきたのよ。猫好き同志で、話が合うんじゃない」

父親の顔にほんの少し笑顔が浮かんだ。「そうですか。猫好きですか。猫は、かわいい。犬は嫌いだ。特に警察は嫌いだ」4人は、一斉に顔を引きつらせた。陽子が場を和らげようと父親に声をかけた。「こんなにたくさん、沢富さんからのお土産。早速、ひよこをいただきますよ」陽子は、包装紙を丁寧に開き蓋を開けた。陽子は、ひよこを全員に手渡した。「ほんと、かわいいわね。お父さん、大好きなんですよ。食べなさいよ。そう、沢富さんも甘党なんだって。ひろ子ったら、お父さんみたいな人を好きになったみたい」母親が笑顔で夫に声をかけた。「あなた、おいしいわ。好きなんですよ。何ぼんやりしてるの」父親は、左手に持っていたひよこの頭をぱくりとかみつき、笑顔で口をもぐもぐと動かした。

沢富は、一気に結婚のことを話したほうが気持ちが打ちとけるように思えた。「お父さん、ひろ子さんとお付き合いしています。将来、結婚したいと思っています。どうぞよろしく願います」沢富は、軽く頭を下げた。沢富がエリート警察官であることを知らされていた父親は、結婚に反対する気はなかった。むしろ、バツイチのひろ子にとっては、宝くじに当たったような幸運だと思っていた。「ひろ子から聞いています。父親は、娘の幸せを願うだけです。田舎もんですが、こちらこそよろしく頼みます」沢富は、すんなりと承諾してもらえてホッとした。確かに警察官を憎んでいるようだったが、結婚とそれとは割り切っているようで安心した。

陽子は二人のなれそめを知りたくなった。「ひろ子、沢富さんと、どこで知り合ったの？」ひろ子は二人の出会いを思い出していた。「沢富さんは、お客さんだったの。いろいろ話しているうち、親しくなったって感じ。それと、沢富さんの上司の奥さんに後押しされて。その上司の方が、ぜひ、仲人をさせてほしいって、言われているの」陽子は、縁とは不思議なものだと思った。「そう、その上司の奥さんが、縁結びの神様ってことね」ひろ子はうなずいた。「そう。奥さんがとてもいい方で、すごく、お世話になっているの」母親が、うなずき口をはさんだ。「それは、それは、上司の方にお礼を申し上げなくては。是非、近々お礼に伺うわ。そう、伝えて、ひろ子」

陽子は沢富がエリートであることは聞かされていたが、もっと彼の素性を知りたかった。「沢富さんは、刑事でいらっしゃるのよね。これからも、ずっと福岡勤務ですか？」沢富は、警察のことを話して父親の気分を害しないかと不安だったが、結婚すれば一生付き合うことになるから、ぎっくばらんに話しておいたほうが良いように思えた。「はい、今のところは福岡勤務です。でも、私の場合、転勤があるんです。まだ、はっきりしていないんですが、近々、東京勤務になるかもしれません」母親は、少し不安げな顔つきで話し始めた。「え、東京ですか？あらま～～。田舎者のひろ子、大丈夫かしら」父親がうなずいて話し始めた。「とにかく、沢富さんについていけばいい。住めば都というじゃないか。沢富家の方々に、かわいがられるんだぞ」

サスペンスドラマが好きな陽子は、話を膨らませた。「ということは、よく、サスペンスドラマに出てくる警視庁のデカってことね。ちょっと、かっこいいじゃない」沢富は、頭を掻きながら誤解を解いた。「いや、違うんです。僕は、警視庁ではなく、警察庁、勤務になるんです。簡単に言えば、警察業務全般を取り扱う仕事です。だから、直接事件にかかわることはありません。地味な仕事です」陽子は、よくわからなかったが、うなずいた。「まあ、警察の事務の仕事ってことね。沢富さんは、出世なされる方だから、ひろ子、しっかり内助の功を發揮しなくっちゃね」

自信のないひろ子は、苦笑いをしながらうなずいた。「東京に行ったら、対馬が遠くなるのよね～～。ちょっと寂しいな～～」沢富がひろ子を励ますように笑顔をひろ子に向けた。「さみしくなったら、カラオケで思いっきり歌いましょう。音痴の僕は、歌わないほうがいいような気がするけど」みんな、一斉にワハハ～～と笑い声をあげた。陽子は夕食の準備に取り掛かることにした。「私たちは、食事の準備をします。沢富さんは、ゆっくりなさってください」陽子、母親、ひろ子たちは、キッチンに向かった。いつもは母親と陽子が食事の準備をしていたが、今日は陽子とひろ子が中心となって準備することになった。

陽子は、小さな声でひろ子に声をかけた。「あの手の顔って、ひろ子好みなのか？好みでも変わったのかしら？」沢富との縁がひろ子にも不思議でならなかった。どちらかといえば軽いノリのイケメンが好きだったが、しかめっ面の刑事と付き合うようになるとは、今でも信じられなかった。「どうしてだろう。きっと、結婚に、一度失敗したからじゃない。自分でもよくわかんない。マスクはいまいちだけど、すごく優しいの。あ～ゆうタイプ、初めて。しかも、デカだもんな～。どうしたんだろうね。神様が与えた運命かも。二度と離婚しないようにって。何というか、愛されているって感じがする。こういう気持ち初めて」陽子は、聞いていて恥ずかしくなった。「あらま～～。そこまでのろける。ごちそうさまです」二人は、クスクス笑い始めた。

陽子は、カトリックが問題にならないかと不安になっていた。「沢富さんは、カトリックじゃないけど、うまくやっていけそう。あまり、縛り付けると険悪になるからね。大目に見てやることも大切よ。前の旦那のような不埒（ふらち）なのは許されないけど」ひろ子は、酔っ払って事故死した前の夫のことを思い出していた。「やっぱ、男ってのは、どうしようもない動物なのかもね。なんと言っても、ダメだった。あいつ、飲み打つ買う、三拍子そろった、どアホだったからな～～。事故でおっちんだのは、神様が下した天罰よ。でも、自分にも悪いところがあったのかも？夫婦仲が悪くなるのは、どちらにも原因があるような気がする。今度こそ、うまくやれるといいんだけど。自信はないけど」

玄関のほうから扉を開くガラガラという音がした。陽子は玄関にかけていった。「おかえりなさい。ひろ子の彼氏が来てるわよ。相手してあげてね」陽子の夫、きよしは、あいよ、と返事すると笑顔でリビングに向かった。きよしの足音に気づいた沢富は、即座に立ち上がり、スーツ姿のきよしが現れると深々と頭を下げた。「お邪魔しています。沢富と申します。よろしくお願ひします」きよしは笑顔で軽く頭を下げた。「道中、大変だったでしょう。空港から1時間半はかかりますからね。今夜は、男3人で飲み明かしましょう。飲める口でしょ」沢富は、それほど強くなかったが、気に入ってもらうためにとことん付き合うことにした。「まあ、そこそこです」きよしは、着替えをするために自分の部屋に向かった。陽子が父親に声をかけた。「お父さんは、ほどほどにね」父親は、黙って小さくうなずいた。

キッチンにやってきたきよしは、陽子に話しかけた。「俺たちは、向こうで飲むから、気にするな」即座に、きよしの背中に向かって、陽子は尋ねた。「食事は？」きよしは、返事もせずにリビングに向かった。「沢富さん、焼酎、飲めますか？」沢富は、日本酒より焼酎のほうが好きだった。「はい、いつも飲むのは焼酎です」きよしは、それはよかった、と言って焼酎のビンをサイドボードから取り出した。「これは、対馬の地酒です。麦と米の焼酎です。お湯で割りますか？」即座に返事した。「はい、お湯でロクヨンぐらいで」きよしは、即座にお湯割りを作った。「あては、刺身と鯛しゃぶ、です。今夜は、死ぬまで飲みましょう。お父さんも、今日はいいでしょう」父親も笑顔でうなずいた。「ほどほどに付き合うとするか。まだ、死にたくはないからな」沢富が、ハハハ〜と笑い声をあげた。

きよしがキッチンに振り向き「おい」と声をかけると陽子が造りの大きな皿を運んできた。続いてひろ子が卓上コンロを運んできた。沢富が二人に声をかけた。「ご一緒にどうですか？」即座に、きよしが返事した。「酒は、男だけで飲むものです」二人は、黙って酒席の準備を続けた。三人がグラスを手にするときよしが乾杯の音頭を取った。「新しい同志に乾杯です。口森家と対馬藩のますますの繁栄を願って、カンパ〜〜イ」きよしは大きな声を張り上げたが、沢富には、意味不明で小さな声でカンパ〜〜イと後に続けた。きよしは、早速、沢富に声をかけた。「沢富さんは、東京生まれとお聞きしていますが、九州もいいところでしょう。対馬は、何もない孤島ですが、自然の恵みがいっぱいです。対馬藩士として、誇りに思っています。でも、最近は・・・」

不安げな表情のきよしは、何か言いたげであった。沢富は、質問した。「対馬にも何か、問題があるんですか？」きよしは、顔をしかめ話し始めた。「いや、何というか。韓国のことなんです。韓国から観光客が来てくれることは歓迎してるんですが、対馬が買収されてるんですよ。対馬に未練がない島民は、韓国人に土地を売って他県に引っ越してるんです。このままだと、人口は減る一方です。このまま買収されれば、対馬は韓国の領土になるでしょう。政府は、こんな孤島なんてどうでもいいのでしょうか。いったい、これからどうなることか。比田勝（ひたかつ）も巖原（いづはら）もコリアタウンです。きっと、韓国人は、対馬をコリアアイランドと呼んでますよ」沢富も対馬が買収されていることは知っていた。北海道と沖縄は、中国が買収してると聞いている。政府は、何の対策も立てようとしなない。

確かに領土買収は、深刻な問題だと思えた。しかし、政府は中国や韓国の土地買収を傍観している。「確かに、おっしゃる通りだと思います。日本は、中国と韓国に買収されています。さらに、これから、外国人労働者が大量に入ってきます。もはや、日本人のほうが肩身が狭くなってしまいますね」きよしは、グイッとグラスを空けると語気を強めて話し始めた。「政府なんて、何の役にも立たん。われら、対馬藩士が戦う以外ない。そうでしょ。沢富さん」突然、対馬藩士といわれて返事に詰まった。沢富もグイッとグラスを空けて返事した。「とにかく、土地買収は緊急問題ですよ。国会議員に訴えていきましょう」黙って聞いていた父親が、静かな声で話し始めた。「時代だ。しょうがない。何の価値もない土地を韓国人は、買ってくれた。感謝している」

父親は、比田勝に持っていた土地を韓国の不動産業者に売却していた。そのお金で佐須奈に新築したのだった。また、水産会社設立資金にも充てていた。きよしは、そのことを知っていたが、韓国の侵略が許せなかった。「お父さん、でも、ひどすぎますよ。土地は買い占める、韓国人の観光客は、韓国人経営のホテルや民宿に泊まる、買い物といえば免税店だけ、島民は何のメリットもない。唯一得をしている人といえば、畑にもならない土地が、高値で売れた人たちだけです。彼らは、島を捨てて、他県に引っ越してしまう。これから、対馬はどうなるんですか。若者は、減る一方です。漁業も衰退しています。仲間で水産会社を立ち上げたけど、これからどうなることか。まったく、先が読めないんです」

ひろ子からきよしについてはすでに聞かされていた。きよしは、対馬藩士といていたが、実のところ、福岡県出身だった。Q大経済学部4回生だったきよしは、過疎地の経済に関心があり、対馬観光を兼ねて島民にインタビューして回った。観光最終日、対馬野生生物保護センターに立ち寄った。神のお導きか、ツシマヤマネコを撮影していた彼の右横に立っていた対馬クイーンの子高生とビビッと目が合った。その女子高生が、陽子だった。きよしは、美人の陽子に一目ぼれしてしまい、それ以後、メールのやり取りをするようになった。そして、大学卒業後、福岡県庁職員として4年間働いたが、両親の反対を押し切って、陽子と結婚するために、県庁を退職し、対馬にやってきた。そして、口森家の養子となり漁業の跡を継いだ。漁業から離れていく若者をどうにかして引き止めたいと3年前に水産会社を立ち上げた。

沢富は、マジな顔つきできよしを励ました。「きよしさん、頑張ってください。僕にできることがあれば、何でも言ってください。きよしさんを、全力で支援します」きよしは、ニコッと笑顔を作りお湯割りを二つ作った。「さあ、同志。義兄弟の契りを交わしましょう。なんだか、勇気がわいてきた。必ず、会社を成功させて見せます。若者が活躍できる島にして見せます。負けてたまるか。ねえ、お父さん」父親は、元気がない声で話し始めた。「時流に乗って精いっぱいやるしかないだろう。きよしだったら、みんなを引っ張っていける。弁は立つし、頭もいい、対馬のためにがばってくれ。俺も、できる限りの援助はする」父親は、目元がうるんでいた。「さすが、陽子を選んだ亭主だけあるばい」父親は、左手で涙をぬぐった。沢富は思った。対馬といえば、林業、漁業の島。今では、観光業は、韓国人に牛耳られている。でも、若者があきらめてしまえば、対馬は韓国に乗っ取られてしまう。とにかく、日本人が対馬を復興する以外にない。

眠たそうにしている父親を気遣い、きよしは父親に声をかけた。「もう、寝ましょうか？沢富さんは、僕の部屋で寝てください。沢富さんと話していると勇気が湧いてきます。これからも、相談に乗ってください」沢富は、頭を掻きながら恐縮した表情で返事した。「いや、僕なんて、世間知らずの刑事です。こちらこそ、いろいろ、教えてください」父親が立ち上がるそぶりをするときよしは、すっと立ち上がり父親の右横に立った。父親の右側を支えながら父親を部屋に連れていくと、駆け足で戻ってきた。「おなかは、すいていませんか？」沢富は、刺身と鯛しゃぶで満腹だった。「いえ、おなかいっぱいです」きよしは、お風呂を勧めた。「それじゃ、お風呂、どうぞ」沢富は、バスルームに案内された。

沢富が翌朝7時に目が覚めると、きよしはすでに起きてランニングに出かけていた。きよしは、草野球をやっていて今日も午後1時から試合に出る予定だった。身支度してキッチンに行ってみると食事の準備がなされていた。ひろ子が明るい声で挨拶した。「おはよ～～。眠れた？ちょっと飲みすぎじゃない？お兄さんに合わせなくてもいいのよ。飲んべ～～なんだから。さあ、食べて。10時には出発しましょう。教会でお祈りしたいから」協会と聞いてひろ子がカトリックであることを実感した。「それでは、いただきます」食事を終えても、父親の姿が見えなかった。「お父さんは？」即座に、ひろ子が返事した。「もうそろそろ来るんじゃない。いつも、9時ぐらいだから」

沢富は父親に挨拶するためにリビングで待つことにした。「父親が9時少し前にやってきた。即座に立ち上がった沢富は、大きな声で挨拶した。「おはようございます。昨夜は、ご馳走になりました」父親は、笑顔で返事した。「大したお構いもできませんで。これからは、いつでも、気楽に、来てください。沢富さんのような方に出会えたひろ子は幸せもんです。田舎者で、世間知らずのわがままの娘ですが、よろしく願います」沢富は、父親に気に入られ、結婚に一步前進したようでウキウキした。「対馬にも教会があるんですね。お祈りして帰ります」父親は顔をしかめ申し訳なさそうに話し始めた。「カトリックは教会を重んじるんです。でも、沢富さんは、気にしないでいいです。なにも、教会で式をあげなければならないという決まりはないんです。沢富さんが、好きなようにやってください」

父親は、口森家がカトリックであることを気にしているようであった。沢富家がカトリックをどう思うか心配だったが、あまり気にしないことにした。「はい、沢富家は、臨濟宗ですが、無宗教のようなものです。どうにかうまくやっていきます。心配なさらないでください」父親は、少しほっとした表情を見せた。ひろ子が突然口をはさんだ。「私たちは、10時には出発するから。お父さんは、のんびりとしてればいいの。神経使うと体に悪いんだから。それと、仲人は沢富さんの上司の伊達夫妻にお願いすることになっている。今度は、仲人さんと一緒に来るから」父親は、黙って聞いていたが、安心したような表情で返事した。「こんな体で申し訳ない。沢富さん、よろしく願います」父親は、深々と頭を下げた。

きよしは、ひろ子の母校である上対馬高校で野球の試合があるため、帰りも陽子が空港まで送ることになった。巖原聖ヨハネ教会は対馬空港をさらに南下し巖原港近くにある。そこまで約2時間かかるということで10時少し前に家を出立した。アルファードは国道382号線をひたすら南下した。日曜日であったが、運よく12時ちょっとすぎに協会に到着した。陽子は、この教会に月一回はミサに来るということだった。神を信じていない沢富は、今一つ教会がピンと来なかった。今後カトリックになりたいとも思わなかった。だが、ひろ子にはカトリックのことについては何も言わなかった。出発まで時間があつたためグリーンパークで時間をつぶすことにした。空港に到着したのは午後4時少し前だった。伊達夫妻のおみ上げに、空港の売店で、かすまき、赤米カステラ、焼酎のやまねこ、しいたけ、対州そば、イカ飯セット、アナゴ、を買った。

対馬の特命任務

対馬やまねこ空港16時40分発の便は、福岡空港に17時10分に到着した。伊達夫妻が在宅であることを確認した二人は早速、伊達夫妻に実家での様子を報告に行くことにした。空港でタクシーを拾い、伊達夫妻のマンションに向かった。夫妻は、一刻も早く話を聞きたくてそわそわしていた。伊達が、ドアを開け挨拶した。「ただいま～～。今、帰りました。朗報で～～す」即座に、キッチンからナオ子が大きな声で返事した。「入って～～。早く、こっち」二人は、キッチンにかけていった。伊達が、声をかけた。「うまくいったみたいだな。それはよかった。結婚に、一步前進ってどこか。疲れただろう。まあ、座れ」沢富が、テーブルにお土産をどさっと置いた。「お土産です。先輩、焼酎も買ってきました」伊達は、ニコッと笑顔を作り返事した。「ありがとよ。今夜も、パ～～といくか」

ナオコが、口をはさんだ。「何言ってるの、二人は疲れているんだから。それより、どうだった。ご両親」テーブルに着いた沢富は笑顔で話し始めた。「ご両親もお姉さん夫妻も大賛成でした。ほんと、ホッとしました。仲人の件も話しました。今度、みんなで対馬観光に行きましょう」笑顔を作ったナオ子だったが、沢富家の承諾が気になっていた。「問題は、沢富家ね。お父様の返事が遅いわね。まさか、反対ってことはないでしょうね」沢富も返事が遅いことに不安を感じていた。「ちょっと、遅いですね。明日にでも、電話してみます。何か気に入らないことでもあるのかな～～。おやじは、結婚は好きなようにやっていいとってたんです。だから、反対するはずはないんです」

ナオコの心にいやな予感が起きた。「とにかく、明日にでも、確認してちょうだい。親戚が、反対するってことがあるからね」腕組みをしたナオ子は、鬼の形相で戦う姿勢を見せた。沢富も次第に嫌な予感が起き始めた。ひろ子まで不安になってきた。伊達が、突然声をあげた。「おい、そう、悲観するな。反対されたってわけじゃない」そうってはみたものの、お見合いの件で問題が起きているのではないかと不安になった。笑顔を作った沢富が、焼酎のビンを高々と持ち上げた。「神様は、僕らの味方です。せっかく買ってきたんです。みんなで乾杯しましょう」ナオ子も笑顔を取り戻し、歓声を上げた。「そうよ。パ～～とやりましょう。ひろ子さん、元気を出して、きつとうまくいくから。食事は、まだなんですよ。今日は、佐賀牛のすき焼きよ。ひろ子さん、手伝って」

翌日、月曜日、沢富は母親に電話した。あまりにもそっけない返事に愕然（がくぜん）とした。それは、父親はかなり重要な事案に取り組んでいるため、子供の結婚話など聞いている暇はないということだった。確かに、いい年をした子供が父親の意見を聞くこと自体子供じみているように思えたが、一生の問題である結婚についてぐらいは仕事より優先して聞いてほしかった。母親には、ひろ子のご両親は賛成してくれたことを伝えたと、度肝を抜く返事が返ってきた。もしかすれば、年明け早々、東京勤務になるかもしれないということだった。理由について聞いたが、母親は全く知らされていなかった。いったい何事が起きたのだろうと考えたが、全く心当たりはなかった。こうなったら、父親の意見を聞く前に、一刻も早く結婚すべきではないかと思えた。まず、福岡で二人だけで式を挙げ、後で、東京と対馬で披露宴をするのが得策のように思えた。

その日、早速、母親との話を伊達夫妻に伝えることにした。伊達と一緒に帰った沢富は、キッチンで話し始めた。「まったく、おやじったら、話を聞いてもいないんです。だから、こっちで話を進めるといいました。それと、まだ、ひろ子さんには話していませんが、母の話なんです。もしかしたら、年明け早々、東京勤務になるかもしれないということです。理由は、わからないんですが。そうなった場合も考えて、結婚は、早めにやりたいと思っています。式は福岡で挙げて、披露宴は、後で、東京と対馬でやればいいと思います。どうでしょう。仲人さん」ナオ子は、ちょっと首をかしげた。「でも、結婚式は、両家の合意を得てないよね。ちゃんと、お父様の承諾を得ないとだめよ。親子に亀裂が入れば、サワちゃんが困るのよ」

伊達も同じ意見だった。万が一、トラブルを起こせば、仲人をやった意味がなくなってしまう。ましてや、沢富家を怒らせてしまえば、警察署長どころではなくなってしまう。「おい、勇み足はいかん。とにかく、お父様の承諾を得ることが第一だ。そう焦るな。ひろ子さんもそう願ってるはずだ。いいじゃないか、東京転勤になっても。ひろ子さんは、ついていくさ」自分の愚かさに気づいた沢富は、ひろ子に事情を話し承諾してもらうことにした。「わかりました。伊達夫妻の立場ってものがありますよね。僕が、バカでした。正月休みに、ひろ子さんと二人でおやじに会いに行ってきます。急がば回れ、って言いますよね」ナオ子は、ホッとした表情で伊達を見つめた。

伊達は、うなずいたが、怪訝な顔で話し始めた。「ナオ子には黙っていたんだが、この際話しておく。もしかすると、俺は、対馬に飛ばされるかもしれん」ナオ子は、対馬と聞いて耳を疑った。「あなた、対馬に飛ばされるって、あの孤島の対馬に転勤ってこと。マジ？」伊達は、眉を八の字にして気落ちした声で話し始めた。「俺も、耳を疑ったさ。沢富は、東京に栄転。俺は、対馬に左遷。いったいどういうことだと思ってさ。でも、事情があるんだ。今回、警察庁長官の特命で対馬における密航、密輸対策特別捜査班が、秘密理に設置されたらしい。そこで、俺がメンバーに選ばれたってわけだ。しかも、俺が班長だ。俺じゃなくてもと思ったが、麻葉摘発に実績のある俺は、外せないらしい」

沢富は、大きくうなずき返事した。「なるほど、そうだったのか。いや～、おやじが重要案件で忙しいと聞きました。おそらく、そのことでしょう。対馬海上保安部だけでは、密航、密輸は取り締まれないと聞いています。密航ブローカーグループが東京、福岡、長崎、佐賀、対馬と密航者を輸送していると聞いています。おそらく、一気に取り締まりを強化するのでしょう。私も、この対策には、賛成です。先輩、ガンガンやってください」ナオ子は、沢富に文句を言った。「ちょっと、サワちゃん、他人事と思って。転勤になれば、私もついていくってことよ。対馬の孤島になんか、行きたくないわ」ふてくされたナオ子は、伊達をにらみつけた。沢富は、気まずそうな表情をしてしばらく考えていた。東京勤務は、警察庁ではなく、警視庁ではないか？

目をギョロギョロさせた沢富は、身を乗り出して言った。「先輩、僕も、きっと、対馬です。間違いない」伊達が、怪訝な顔で尋ねた。「でも、サワは、警察庁じゃないのか？」沢富は、顔を左右に振った。「いや、きっと、警視庁です。でも、勤務は、対馬ってことですよ。おそらく、僕を対馬密航密輸対策特別捜査班のメンバーにするために、移動させたんです。そうじゃないと、今頃、移動なんてありえないでしょ」伊達もナオ子もうなずいた。ナオ子が、納得したような顔つきで話し始めた。「もし本当だったら、いつから、対馬に行くんだらうね」沢富が予測を話し始めた。「おそらく、来年の4月あたりでしょう。年明け早々、メンバー紹介と今後の方針について県警本部長から話があるはずです。僕と先輩が組むことになりそうですね」

伊達は、次第に沢富の予測が現実的に思えてきた。ナオ子が、両手でポンと響かせた。「それじゃ、対馬勤務が決まってから、お父様に結婚の承諾を得ればいいじゃない。お父様も、重要な任務を引き受けた子供のために、賛成するはずよ。まさに、好機到来ね。でも、対馬に 何年ぐらいいるのかしらね」沢富が一つうなずいて返事した。「きっと、1年ぐらいと思います。ガンと一発かませば、結構効果があるんです。まあ、政府もやっと腰を上げたってことです。いいことじゃないですか。先輩」伊達も大きくなずいた。「今頃になってといたいところだが、今こそ、しっかりと取り締まらなければ。密輸手口も巧妙になっている。麻薬売買をやっている中国マフィアは、韓国人を使って日本に密輸している。韓国人から受け取った麻薬を日本人が売りさばくってわけだ」

沢富も知りえた情報を話し始めた。「彼らは、漁船を使っているらしいですね。漁船による引き渡しをやられたら、取り締まりも難しいでしょう。麻薬を受け取った船員が名護屋港で密輸グループに渡しているとの情報もあります。対馬島と対馬近海では、マフィアが暗躍しているということです」ナオ子が、おびえた顔で尋ねた。「麻薬をどこに隠してるの？」伊達が、巧妙な手口を話した。「麻薬の隠し場所は、昔からあの手この手といろんな手を使っている。なんせ、優秀な麻薬犬がいるからな。奴らも知恵を絞って巧妙な手口を使う。でも、どんなところに隠しても、麻薬犬は発見できる。だから、密航で麻薬を運ぶ。しかも、国内で取り調べを受けてもわからないところに隠す。一つには、口紅の中に隠していた例があった。まったく、知恵のあるやつらだ」

沢富は、うなずいた。「このままだと、マフィアのやりたい放題です。戦いましょう、日本のために、先輩」腕組みをした伊達は、目を閉じ何か考えているようだった。「やらねばならんが、これは、危険な仕事だ。一つ間違えば、こちらが、消される。ナオ子にも危険が及ぶ。命がけの仕事だ。マフィアは、そこいらのコソ泥とは訳が違う。世界をまたにかけた、殺し屋だ。金のためなら、人の命などなんとも思っていない。それを覚悟で、ついて来てくれるのか？ナオ子」ナオ子は、震えが起きていた。あまりにも怖い話を聞かされて、返事ができなかった。沢富が、話し始めた。「そうですね。この仕事は、命がけです。だから、極秘に推し進められるのでしょうか。また、だれにでも任せられる任務ではありません。先輩は、引き受けられるんですか？」

伊達はナオ子に決意を伝えた。「俺が抜擢されたということは、俺は期待されたということだ。ならば、やらねばならない。でも、マジ、危険だ。ナオ子は、ここで、俺が生きて帰ってくるのを待ってる。アメリカ、ロシア、中国、日本、もはやマフィアに牛耳られている。でも、奴らの好き放題にさせるわけにはいかん。警察は国民を守る義務がある。俺は戦う。いいな、ナオ子」ナオ子は、まだ震えていたが、小さくうなずいた。「サワちゃんが、一緒だったら、安心よね。サワちゃん、主人、守ってあげて」沢富は、苦笑いをしながら返事した。「先輩は、ヤクザでもビビらせるんですよ。僕なんか、先輩のおかげで命があるようなものなんです。まあ、対馬は、福岡からすぐそこです。いつでも会えますから、心配いらないですよ。早速、おやじに移動の件を問いただしてみます。何かわかり次第、先輩に知らせます」

早速、翌日の火曜日、沢富は今回の特命任務についてメールで確認した。それは、沢富が予想していたものだった。警視庁の予測では、今、対馬を中継地点として麻薬の密輸がなされているということだった。中国マフィアから韓国に持ち込まれた麻薬は、韓国麻薬グループによって対馬に運び込まれている。それには、漁船が使われていると予測され、韓国漁船が日本漁船に海上で引き渡していると考えられる。そして、麻薬を受け取った漁船は、目立たない対馬の小さな漁港に立ち寄り、そこで仲間に手渡している。おそらく、彼らは、民宿か、釣り宿で魚のお腹の中に受け取った麻薬を詰め込んでいる。麻薬を詰め込まれた冷凍魚は、漁船で佐賀か長崎の小さな港に運ばれ、そこで、荷揚げされた麻薬が詰め込まれた冷凍魚は、冷凍トラックで関西、関東方面へ運ばれている。

今回の主な任務は、対馬警察内部と市会議員の捜査だった。また、特に、対馬における中継地点、麻薬を魚に埋め込んでいる加工場所の発見、並びに彼らの検挙にあった。今回の特別捜査は、対馬警察内部に対する超極秘捜査であるため、警察関係者には公開されないとのことだった。メンバーは、伊達、沢富、稲垣の警察官3名、鹿取、草凧のマトリ（麻薬Gメン）2名、捜査期間は、1年間、詳しい指示は、的野本部長から伊達班長を通じてなされるということだった。自分に関しては、広域捜査となるため警視庁に移動させたとのことだった。メールの内容をまとめた沢富は、その夜、早速、伊達に伝えるために大濠のマンションに訪れた。いつものキッチンテーブルに着いた沢富は、父親から受けたメールの内容を説明した。伊達は、今回の任務は警察庁の特命であり、かつ危険であることを再認識した。

深刻な顔つきの伊達は、しばらく黙り込んでいた。任務遂行に関しては、納得できたが、沢富がメンバーに入っていることに不安があった。麻薬捜査において殉死した警官が多かったからだ。麻薬取引においては、多額のお金が動く。そのため、マフィアは、邪魔者と思えば即座に消す。素人同然の沢富が、一つへまをすれば、奴らにとらえられ、事故死に見せかけて消される。今回の捜査だけは、沢富は外すべきではないかと思えた。眉間にしわを寄せた伊達は、ゆっくり話し始めた。「話は分かった。ちょっとな～。サワがメンバーとは？サワ、今回の仕事は辞退したらどうだ。あまりにも危険だ。単なる強盗事件の犯人を捕まえるのとは訳が違う。今回は、マフィアが相手だ。一步間違えば、簡単に消されてしまう。それでも、いいのか？」

沢富は、じっと静かに話に聞き入っていた。沢富にとって、特命任務の刑事職は、警察庁での出世のための一過程でしかなかった。警察庁特命を無事果たせば、出世に一步近づく。でも、一つ間違えば、命を落とす。沢富は悩んだ。父親は、危険であっても、実績のある敏腕の伊達刑事と組めば無事任務をこなすと思ったに違いない。しかし、伊達の話を知っているうち、その考えは甘いように思えてきた。確かに、この任務を遂行できれば、警察庁での出世は約束されているに違いない。だからこそ、父親は、この危険極まりない任務を与えたのだろう。本当に、素人がこんな危険な任務を遂行できるのか？伊達刑事の足手まといになれば、伊達刑事も危険な状況に追い込んでしまう。きっと、伊達刑事は、ド素人のサワは、足手まといだ、といたいのである。

伊達は、話を続けた。「きっと、対馬の警官の中にマフィアに買収された奴がいる。これは、マフィアいつも使う手だ。そして、買収された警官は、いずれ口封じのために消される。マフィアとはそういう非人道的な奴らだ。サワは、現場刑事とは違う。将来、国家警察を策定するという大きな任務がある。まだ、正式命令は出ていない。今だったら、断れるんじゃないか。おやじさんに、断りを入れろ。それがいい。なにも、恥ずかしいことじゃない。人には、それぞれ、その人なりの道がある」沢富は、心が揺らいでいた。伊達の思いやりは、もっともだった。伊達の足手まといになることは目に見えていた。肩を落として眉を八の字にした沢富は、元気のない声で返事した。「はい、一日考えさせてください」ぼんやりと立ち上がった沢富は、さみしそうに肩を丸めて玄関に向かった。

翌日、水曜日、7時半ごろ、沢富が博多署の近くにある吉野家で朝食をとっていると”水の星へ愛をこめて”がスマホから流れてきた。今頃何かとタッチするとイヤホンからひろ子の甲高い声が突入してきた。「サワちゃん、ニュース聞いた？出口ちゃんが、死んだのよ。あ、対馬北署の出口君が水死体で発見されたんだって。事故じゃないかって言ってたけど、絶対事故じゃない。誰かに殺されたのよ。あ、出口君って、幼馴染のクラスメートだったのよ。サワちゃん、犯人捕まえて」寝耳に水の情報に全く返事のしようがなかった。「何言ってるか、よくわからない。対馬のニュースだね。署に行って詳しいことを聞いてみる。また後で電話する。今、吉野家なんだ。切るよ」沢富は、食べ終わると署にかけていった。伊達は、デスクでぼんやりと考え事をしていた。「先輩、今朝のニュース聞かれましたか？対馬の件」

伊達は、小さくうなずいた。「あれは、やられたんだな。対馬育ちの警官が、事故で死ぬってことはないだろう」ひろ子もそのように言いたかったに違いないと沢富はうなずいた。「確かに、変ですよ。やはり、マフィアですか？」伊達は、しばらく黙って考えていた。「いや、そうとも言えん。確かに、マフィアが絡んでいることは間違いないだろう。でも、手を下したのは、もしかしたら・・・」沢富は、身を乗り出して質問した。「もしかしたら、だれですか？」伊達は、ウ～～とうなずいて返事した。「あくまでも、俺のカンだが、警察内部のものかもしれん。早く言えば、口封じだ。出口巡査長は、誰かの悪事を知りえた。そこで、正義感の強い彼は、自首を進めた。だが、その警官は、自首するどころか、正義感の強い巡査長を自らの手で始末した。考えられないことではない」

沢富は、マフィアの怖さが身に染みてきた。「ということは、マフィアは警察官を買収して、麻薬の密輸をやっているってことですね。我々の敵は、マフィアだけでなく、警察官でもあるってことですね。おそらく、出口巡査長は、信用していた上司にやられたのかもしれませんが。まったく、かわいそうに。きっと、まじめで正義感の強い、青年だったと思います。必ず、犯人を捕まえてやる。そう、その彼は、ひろ子さんの幼馴染でクラスメートだったと言っていました。僕はやります。先輩、僕を仲間に入れてください。僕も、やるときは、やるんです。お願いします。敵をとってやりたいんです」伊達も、正義感の強い青年がやられたと思うと、やるせなかった。きっと、この敵は取ってやると誓った伊達は、沢富に振り向き小さくうなずいた。

翌日、15日、木曜日、伊達と沢富は、午前10時に的野本部長のところ行くように署長から指示を受けた。二人は、対馬特別任務の件だとピンときた。午前10時、1分前にドアを2回ノックした。部屋の中から野太い声の返事が響いた。「どうぞ」ドアを開け覗き込むとソファの横に3人の背広姿の男性が立っていた。伊達と沢富が中に入っていくと3人は軽く会釈した。本部長は、ソファまでやってくると3人を紹介した。「こちらは、麻薬取締官の鹿取さんと草凧さんだ。こちらは、警視庁組織犯罪対策第五課の稲垣さん。座りたまえ。集まってもらったのは、超極秘特別任務の伝達だ。この任務は、警察には公開されない。この度、警察庁長官から対馬麻薬取締特別班設置の特命があった。設置期間は、1年。そのメンバーとして、5人が選ばれた。年明け早々、設置する。詳しい打ちあわせは、12月から行うとして、今日は、顔合わせとカバーについて説明する」本部長は、一呼吸おいて、話を続けた。

「班長は、伊達警部にお願いします。また、伊達警部は、比田勝港近くのナイトクラブのマスターをやってもらおう。ちょっと戸惑うだろうが、ピンときたお客をチェックしてくれ。沢富警部補は、来年1月から3月までは、警視庁組織犯罪対策第五課で勤務。4月から対馬北署に赴任。主な任務は、対馬北署内部の情報収集。稲垣警部補は対馬南署に4月から赴任。同じく南署内部の情報収集。草凧さんは、旅の記事を書くルポライター、民宿を徹底的に取材してほしい。鹿取さんは、民宿のオーナー。民宿のオーナーたちと可能な限り親しくなって情報をとってほしい。詳しいことは、12月の打ちあわせで煮詰めていく。会議場所としては、Nホテルの会議室を準備している。対馬の件は、ご存知だと思うが、対馬北署の巡査長が水死体で発見された。事故と殺害の両面から捜査されているが、おそらく、殺害されたとみていい。今回の特命は、非常に危険な任務となる。心してかかってほしい。何か、質問は？」

伊達が小さな声で質問した。「やはり、内部犯行でしょうか？」本部長は、自分の考えを述べた。「あくまでも推測の域に過ぎないが、対馬警察の内部にマフィアに買収された警官がいると考えられる。今回の捜査は、られらを突き止めることにある。また、彼らを保護することでもある。お分かりのように、彼らはいずれ消されるからだ。ある程度の確信が得られた場合、彼らを取り調べの上、処分と保護を行う。もし、こちらの動きを察知されれば、こちらがやられることになる。非常に危険な任務だ」

沢富が続いて質問した。「ということは、警察官たちから、彼らの情報を得るということになりませんが、かなり難しそうですね」本部長は、うなずいた。「かなり危険な情報収集となる。だから、ナイトクラブを使うのだ。警官を酔っ払わせて、油断させるのだ。酔って、うっかりしゃべることがある」沢富と伊達は、大きくうなずいた。本部長は、さらに話を続けた。「麻薬の密輸には、漁船が使われている。対馬のどこか小さな漁港に持ち込まれた麻薬は、民宿あるいは釣り宿で魚の腹の中に埋め込まれているとみている。その拠点を発見することは、至難の業だ。そこで、情報収集をやりやすくするために、ナイトクラブを使う」本部長は、背筋を伸ばして一息ついた。

四人は、伊達警部をナイトクラブのマスターにした理由に納得したようで、小さくうなずいた。さらに、本部長は話を続けた。「ナイトクラブにはマフィアも出入りする可能性がある。伊達警部は、彼らの観察とホステスからの情報をとってほしい。マトリの二人も親しくなった民宿や釣り宿のオーナー、網本、漁協の職員、何かピンときたら、ナイトクラブに連れてきてほしい。そして、酔わさせて油断させる。きっと、酔っ払って口にする言葉から、糸口がつかめるはずだ。いくら経費を使っても構わない。警察の腐敗を一刻も早く食い止めなければ、日本の警察がマフィアに乗っ取られてしまう。みんな、よろしく頼む」5人は、一斉にうなずいた。

沢富は、ひろ子との結婚が不安になってきた。来年早々、東京勤務、4月からは、対馬勤務。ひろ子との結婚の打ち合わせもできなくなってしまう。仲人の伊達夫妻にも迷惑がかかる。伊達にそのことを打ち明けると、今夜、その件で話し合うことになった。また、ひろ子にも、早めに、対馬勤務のことを打ち明けることが賢明に思え、電話すると、ひろ子も話したいことがあると言って、今夜、会いたいと言ってきた。そこで、ひろ子と伊達夫妻の家で落ち合うことにした。午後7時過ぎ、キッチンに4人がそろると伊達が、口火を切った。「ナオ子、今日、本部長から特命の内辞を受けた。来年早々、俺は、対馬勤務となる。予測していた通りだ。期間は、1年だ。危険な任務だから、ナオ子はここで待っていてくれ。沢富も、来年は対馬勤務となる」

ひろ子が、目を丸くして話し始めた。「え、対馬勤務、サワちゃんが。マジ？」沢富は、小さくうなずいて返事した。「来年の1月から3月までは、警視庁勤務で、4月から対馬北署勤務となる。まったく、大切な時に転勤だ何って。ごめん、ひろ子さん」ひろ子は、呆然としてしまった。なんとって返事していいかわからなくなった。結婚の準備は全く進んでいない。このままだと、結婚は再来年になってしまうと思えた。「それじゃ、結婚は、再来年ってこと、サワちゃん」沢富は、断腸の思いで小さくうなずき返事した。「ごめん。今回の任務は、ちょっと危険が伴うし、休暇も取れない。だから、結婚は、対馬勤務を終えてからということになる。本当に、ごめん」

ひろ子は、目の前が真っ暗になった。幼馴染の出口君は水死体で発見され、婚約者の沢富は、対馬に行ってしまう。暗闇に取り残されたような気持ちになってしまった。「1年間、待てばいいのね。悔しいけど、仕事だもんね。刑事の妻になるってことは、こういうものなのね。分かったわ。だったら、出口君の敵を必ず取ってよ。島を知り尽くしている出口君が、事故だなんて、絶対あり得ない。間違いなく誰かかに殺されたのよ。サワちゃん、きっと犯人を捕まえて。私にできることがあれば、協力するから」島を知り尽くしているひろ子は、何か協力できるように思えた。落ち込んだナオ子が、質問した。「ねえ、ついて行っちゃ、ダメなの？一人ぼっちって、さみしいわ。対馬に引っ越して、いい？」

伊達は、顔を振った。「だめだ。危険だ。今回だけは。わかってくれ」ナオ子は、肩を落としてしょげてしまった。ひろ子が、ポンと手を打ち口をはさんだ。「そうだわ。ナオ子さん、私と住めばいいのよ。対馬で。絶対、仕事の邪魔しないから。いいでしょ、伊達さん」伊達は、返事に困った。まったく、仕事にかかわらないのであれば、別に二人が対馬観光しようが構わない。しばらく考えて、ウ〜〜となり声をあげて返事した。「ひろ子さんも、対馬に住みたいのですか？」ひろ子は、出口巡査長の敵をとるために何か情報を集めたかった。「はい、対馬でタクシーの運転手をします。ナオ子さんは、対馬観光ということで。お願いします。この通り」ひろ子は、両手を合わせてお願いした。伊達は、沢富に声をかけた。「おい、どうする？」沢富は、問題ないように思えた。「先輩がいいんだったら、僕は構いません」伊達は、しかめっ面で、うなずいた。